
Nacht **置き去りにした一つの思い出**

灰色日記帳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Nacht 置き去りにした一つの思い出

【Nコード】

N0205Y

【作者名】

灰色日記帳

【あらすじ】

「女子中学生変死事件」。

鵜村にて一人の少女が何者かに惨殺され、見るも無残な姿で発見された事件。今日はその事件が起きてから二年が経った日の、九月二十四日。

犠牲となった少女と親しかった少年、一月は生前に少女が祖母と二人で暮らしていた家へと向かう。事件の真相、そして少女の死の真相を探る為に。そこで彼が目にした物は……。

断罪、贖罪、そして悲劇の物語が今、紐解かれる。

其ノ零 ～一月ノ追憶～（前書き）

どうも、他の連載小説でお世話になっている方は改めまして。
初めての方は初めまして。灰色日記帳と言つ者です。

これまで連載中の作品では「虹色冒険書」という名前を使っていますが、この作品ではその名前は余りに不釣り合いなので、違つ名前を使わせて頂きます。

この小説は、「Fragment of braves」とは相反する雰囲気、上手に書けるか不安です。

読んでみての感想、アドバイス、また誤字脱字の指摘など、是非お願いします。

この物語はフィクションであり、実在の地名、人名とは一切関係ありません。

其ノ零　　一月ノ追憶

人が死を迎ふる時、その肉体は土へと帰るが、生前にその者が抱きたりし想ひは現世に残る。

怒りや恨み、憎しみ、嫉み。

現世に残されし死人達の負の想ひは連なり、寄り添ひ、やがて「鬼」となりて形を成す。

「鬼」となりし負の感情の塊は、行き場のなき想ひを鎮める生贄を求めて生者を襲ひ、死の世界へと誘ふ。

死の世界へと誘はれし生者の魂は「鬼」の負の思念に取り込まれ、思ひ出も記憶も、理性も全て失ひ、「鬼」の一部となる。

鵜村の古い言い伝えより。

寝起きでぼんやりとした意識のまま、僕は布団に片手をつけて身を起す。

そして、視線を部屋の窓へ向ける。

空は雲に覆われていた。汚水を吸った脱脂綿のような雲が、陽の光を遮っている。

今日の天気は曇り、か……雨は降るのかな？

そんなことを思いつつ、僕は布団を畳んで押入れに押し込んだ。

布団を片づけると、畳張りの床が姿を見せた。そして僕はもう一度、窓から外を眺める。

前々から思っていたことだけど、曇りの日は何だか村の雰囲気が変わって見える。

軒を連ねた民家に、朝から畑仕事をする人々の後ろ姿、学校に向かう小学生達。

いつも見慣れている筈なのに、空が雲で覆われているというだけで全てが変わって見える。

上手く言葉では言い表せないけど、陽の光に照らされていない村の風景はどこか無機質で、物悲しくて……何かに例えらるとするならば、白と黒だけで描かれた絵画のようだった。

……なんて、何だか詩人みたいな言い回しだね。

ああそうだ、自己紹介を忘れてた。僕の名前は金雀枝えんじだいつき一月。

十五歳、職業(?)は高校一年生。

『金雀枝』って名字はどうも珍しいらしく、「変わった名前だね」とかよく言われる。

二文字目の『雀』という字を覚えるのには相当苦労したのを覚えている。

『山田』とか『田中』とか、書きやすい名字だったら良かったのに、なんてことを本気で思った程。

この鵜村には、僕みたいになやこしい漢字が含まれた名字の人は少なく、

そういったシンプルな漢字から構成された名字の方が多かったらしい。

^{かひな}鵜村。それが僕が生まれ育ったこの村の名前。

都市部から離れた田舎にあるこの村は、田畑や民家が軒を連ねていて、

少し寂れた雰囲気があるけど、自然が豊かで、きれいに澄んだ空気に包まれている。

四字熟語を使って表現するなら、『^{ふうこうめいび}風光明媚』という言葉がよく似合う農村だ。

田舎の割に人口は結構多くて、村の中には小中高の学校もある。

村の名前になっている「鵜」（かささぎ）って言うのは、ある鳥の名前。

この鳥はカチガラスやコウライガラスとも呼ばれ、大正十二年に佐賀県の天然記念物に指定されたという。

どうしてこの鳥が村の名前になっているのかは分からない。村に何か縁のある鳥なのかと思ったが、真相は不明だ。

今日は九月二十四日。

一九九三年にはノロドム・シハヌークがカンボジアの国王に再即位した日だったり、

一九九九年には台風十八号が熊本に上陸した日だったりもする。そして、この九月二十四日という日は、僕にとって一年の中で最も因縁深い日だ。

畳の上に仰向けになって、僕は机の上の写真立てに視線を向ける。写真に映っているのは面だけを外し、首から下を剣道着に包んだ二人の少年少女。

左側でぎこちない笑みを浮かべているのは中学二年だった頃の僕。

その隣、右側に映っている女の子は秋崎琴音。あきさきことね

ピースサインをしてるこの女の子は、僕と同じ師匠の下で剣道の稽古に励んでいた子。

つまり僕と同門だった子だ。

思い返せば、琴音と僕が知り合ったのはお互いが小学三年生だった頃。

僕が剣道場に通り始めて間もない頃だった。

入門したての僕が道場で稽古に励んでいる琴音を初めて見た時、

正直に言つと僕は彼女を男の子だと思った。

その理由は、面で顔が隠れていたというだけでなく、彼女の戦いっぷり。

覇気に満ちた掛け声と共に、相手を圧倒する彼女の姿は勇ましく、格好良かった。

そこら辺の男の子よりも数倍は格好良い、そう言ってもいい程に。

僕はあの子は男の子で、僕よりも年上で、何年間も剣道をやっている先輩なのだろうと思った。

稽古終了後に彼女が面を外した時、短い髪型の女の子の顔が出てきた時は心底驚いた。

さらに琴音が僕と同じ年で、同じ小学校の、

それも隣のクラスに在籍していると知ったときはもつと驚いた。

知り合ってから、剣道場だけでなく、小学校でもよく会うようになった。

休み時間に一緒に遊んだり、たまに放課後に家に来ることもあった。いつしか琴音は、僕にとつて同門であると同時に、一番親しく、そして最も大切な友達になっていた。

入門して半年程経った頃、僕は道場で一度、琴音と試合をした。結果は僕の完敗。

僕が繰り出す攻撃は一発残らず完璧に受け止められ、試合開始から一分と経たず、僕は面を打たれた。

あれは恐らく、『試合』にすらなっていなかっただろう。

僕は闇雲に竹刀を振り回し、琴音は僕の面を一撃打っただけのこと。実力の差は僕の思っていた以上に大きかった。

彼女の強さだけでなく、自分の未熟さをを思い知らされた瞬間だった。

聞いた話によると、彼女は小学一年の頃から剣道を始め、

そして二年という短期間であそこまで強くなったのだという。

琴音は別に、飛びぬけた才能を持っていた訳でもなく、

入門した時は僕と変わらない、ただの小学生の女の子だったらしい。

彼女は必死に稽古に励み、それこそ血の滲むような努力の果てに、あそこまでの強さを手に入れたそうだった。

そのことを聞いてから、僕も必死に稽古に励んだ。

強くなりたいたいという気持ちは勿論あった。

ただそれ以上に、琴音に少しでも追いつきたいという気持ちが強かった。

厳しい稽古にくじけそうになる度に、

『琴音はこんな稽古を三年も積んできたんだ、男の僕が負けていてどうする』、

そう自分に言い聞かせて、気持ちを奮い立たせてきた。

剣道を始めてから、残り三年の小学校生活はあっという間に過ぎた。一年、二年、三年が経ち、気が付いた頃には六年生になっていて、卒業式を迎えていた。

卒業証書授与の時、名前を呼ばれるのを待つ間、僕は六年の小学校での思い出を振り返っていた。

入学式、遠足、運動会、学芸会、マラソン大会。友達の誕生日会に、クラスレク。

思い返せば思い返す程、六年の思い出が僕の頭に蘇ってきた。

式が終わってクラスでの帰りの会の後。

僕は家へ帰ろうと、卒業証書の入った賞状筒を片手に歩を進めていた。

その日は夕焼けで、空が鮮やかなオレンジに染まっていたのを覚えている。

僕の家が見えてきた頃だった、聞きなれた声で後ろから呼び止められた。

振り向くと、一人の女の子が手を振りながら、僕の方へと駆け寄って来ていた。

その子は琴音だった。彼女は僕の近くに寄ると、いきなり僕の腕を掴んで駆け出した。

“一緒に来て欲しい所がある”、僕の手を引きながら、彼女は一言だけ告げた。

それから彼女は、僕の事などお構いなしに目的地まで猛ダツシユした。
その時は、雪面で走り回る子供に引きずられるソリになった気分だった。

夕日に照らされた道をどれくらい走らされただろうか、

ようやく琴音が足を止めてくれた頃、僕は疲労で地面に倒れ込んだ。

そこは通いなれた剣道場の前だった。琴音は僕をここに連れてきたかったらしい。

彼女はまた僕の手を引いて無理やり立たせ、道場の中へと引っ張り込んだ。

ずっと走りっぱなしだったというのに、彼女は疲れていなかったのだろうか。

その日、稽古でいつも使っている畳張りの剣道場には、僕と琴音以外は誰もいなかった。

窓からは夕日の光が差し、部屋をオレンジ色に照らしていた。

嗅ぎなれた独特の畳のにおいに、壁にかかった掛け軸。

僕がここに通い始めたころから、何一つとして変わっていなかった。時計の長い針は、十二時前を指していた。

時間はまだ昼前だった。この時間帯なら、人がいないのも納得できた。

僕ら二人の他に誰もいないというだけで、道場がいつもより広く感じた。

琴音は、どうして道場に僕を連れてきたかったのだろうか？

理由を尋ねようとした時、琴音が僕の面と竹刀を僕に向けて投げ渡した。

戸惑いながらも二つの剣道具を受け止め、視線を琴音に戻す。

彼女は面をかぶって、竹刀を握っていた。

そして、僕をこの剣道場に連れてきた理由をようやく教えてくれた。

彼女は、僕と剣道の試合がしたかったのだ。

思えば、琴音と剣道の試合をしたのは、入門したてだった頃のあの一回だけだった。

小学校卒業の思い出作りにもなるかと思った僕は、彼女の申し出を受けた。

その時は、僕も琴音も剣道具は面以外、籠手も胴も身に着けていなかったなので、

『面を打たれたら負け。それ以外の部位は狙わない』というルールを設けて試合を行った。

試合の結果的には、僕の負けだった。

初めての僕との試合から三年、琴音はさらに強くなっていったのだ。足さばきはより俊敏に、動きに無駄が無く、

打ちは素早く、かつ針穴を通すように正確に、僕の面を狙って来た。

琴音の攻撃を僕は必死に防ぐ。そして時に反撃を返す。

『互角』と呼べるかは微妙だった。だが少なくとも『試合』として成り立ってはいただろう。

開始から十分近く経ち、先に言ったように僕は負けた。

長時間の打ち合いでスタミナが切れ、集中力が途切れた瞬間を突かれた。

その一瞬の隙を突くセンスといい、途切れることのないスタミナといい、琴音の凄さを改めて実感した。

試合が終わった後、面を外して壁際へ移動し、背中を壁に寄り掛か

らせる体制で座り込む。

呼吸を整えていると、僕の頬に冷たい物が押し付けられた。

僕はそれを受け取った。その冷たい物は、五百ミリリットルのペットボトル飲料だった。

その中身は冷やされたお茶。

琴音の仕業だった、彼女は僕の隣に座る。

彼女の手には、僕に渡されたのと同じペットボトルがあった。

そのキャップを外そうとはせず、今の試合を踏まえて、僕にいくつかの助言をくれた。

いや、あれは助言と言うよりは『指導』に近かっただろうか。

『足さばきを練習したほうがいい』とか、『体力をもっとつけた方がいい』とか……

剣道に関する事を、僕の隣でいろいろと講釈し始めた。

最早、僕には彼女の話をもとに聞ける程の体力は残っていなかった。

うんうん、と適当に相槌を打ちながら聞き流していたから、

琴音が僕に何を教えていたのかはわからない。

だけど、彼女が最後に言った言葉だけは、今でもはっきりと覚えている。

“ 中学に進学しても、一緒に剣道やろうね ”。

琴音は僕にそう言ってキャップを外し、ペットボトルを持った腕を僕の方へ伸ばした。

彼女が何をしたいのか察した僕も、キャップをはずしてペットボトルを伸ばす。

“ 小学校卒業、お互いにおめでとう ”。

その琴音の言葉の後、乾杯をするように、互いのペットボトルを打

ち付け合った。

小学校を卒業した日の午後、夕日に照らされた道場の片隅。僕と琴音は、ペットボトルのお茶を飲み交わした。

中学に進学した後も、僕と琴音は変わらず剣道場に通い続けた。

加えて僕達は中学校の剣道部に入部し、より本格的に剣道の稽古に励んだ。

その頃からだっただろうが、今までショートの髪型だった琴音は髪を伸ばし始め、胸もふくらみ初めていて、小学校の頃よりもずっと女の子らしくなっていた。

僕はこれまで、琴音の事を一番大事な友達だとは思っていたけど、彼女にそれ以上の感情を抱いたことは無かった。

その気持ちを自覚するのに、そう時間はかからなかった。

僕は、琴音の事が好きになっていったんだ。

真面目でひたむきで、優しく、何事にも一生懸命な彼女のことが、いつの頃からか好きになっていったんだ。

だけど、彼女にその想いを伝えようとはしなかった。

今はまだ、琴音とは『仲の良い友達』という関係でいいと思ったから。

彼女と共に剣道の稽古に励めるだけで、彼女の側にいられるだけで十分だと思っていた。

だから、抱いた想いは胸の中に仕舞って、ただひたすらに強くなることを目指していた。

中学二年の夏、剣道の大会の決勝戦で、僕と琴音は竹刀を交えた。同じ中学校の者同士が決勝で戦うことは、これまでも殆ど例がなかったという。

小学校三年の頃の最初の戦い、小学校の卒業式の日、二度目の戦い、そして、あの決勝戦で、僕達が戦うのは三回目だった。

はつきりと断言出来る。

その時の琴音は、剣道を初めてからこれまで僕が戦ったどの相手よりも強かった。

三度目の戦い、やはり僕は敵わなかった。

だけど、その試合が終わった時、僕は悔しくなかった。

悔しいどころか、むしろ満たされた気持ちだった。

決勝戦という最高の場で、何年も共に稽古に励んだ親友の琴音と全力の力をぶつけ合って、

そして負けたんだ。悔いなど、欠片一片たりとも無かった。

負けたのに、嬉しかった。

今でもどうしてだかわからないけれど、嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

閉会式が終わって、僕は琴音と話していた。すると、僕の母親が会場まで迎えに来た。

母は琴音と僕が一緒にいるのを見て、バッグからカメラを取出した。そしてなんと、二人で記念撮影しないかと提案してきた。

僕の母親は、琴音と僕が小学校から仲の良い友達だということを知っているのだ。

母の提案に、僕は渋った。

周りに人が沢山いるのに女の子とツーショットなんて、なんだか恥

ずかしかった。

けど、琴音の方はそんなことを気にする様子も無く、ノリノリで僕の腕を引っ張った。

突然の出来事に戸惑ったけれど、内心は嬉しかった。

まさか、こんな場で好きな女の子と写真を撮れるとは思っていなかったから。

その時に撮った写真が、今も机の上の写真立てに飾られているこの写真だ。

この写真の琴音の笑顔を見ると、数年経った今でも彼女が在りし時のことを思い出す。

道場で初めて知り合った時のこと、一緒に剣道の稽古に励んだこと、この写真を撮ったあの決勝の日のこと……

数えきれない程の琴音との思い出が、砕かれた鏡の欠片を散らすように僕の頭に蘇る。

そして同時に、耐え難い程に胸が苦しくなる。

苦しくて悲しくて悔しくて、あの時の馬鹿だった自分のことが赦せなくなる。

……ん？ どんじりってなのかって？

ああそうだ、まだ……言っていないかったね。

彼女は、琴音はもう……

この世には、いないんだ。

其ノ零　　一月ノ追憶　　（後書き）

どうでしたか？　第零話は全て主人公の追憶でした。

これからの更新ですが、あくまで「Fragment of braves」の方がメインですので、更新頻度は遅くなると思います。この作品を読んでみてのご感想があれば、是非ともお寄せ下さい。

其ノ巻 〱全テノ幕開ケ〱（前書き）

零話が字ばかりで読む気が失せた方は、ここから読んで頂いても大丈夫です。

其ノ巻　〜全テノ幕開ケ〜

事件は二年前の秋に遡る。

鵜村の某中学校の校庭にて、一人の女子生徒（十四歳）が変死体となって発見された。

その時刻は午後六時半頃。下校時刻を過ぎ、陽が沈み始めた頃だった。

第一発見者は、被害者の女子中学生と同じクラスに所属していた当時十四歳の男子生徒。

男子生徒からの通報を受けて現場に駆け付けた警官たちは皆、言葉を失った。

待ち受けていたのは、想像を絶するほどに残酷で悍ましく、戦慄すべき光景だった。

静寂の中、仰向けに倒れていた女子生徒は、最早人間としての形状を留めていなかった。

両手足は不自然な方向に捻れ、長い髪がもつれてカーテンのように顔の半分を覆い隠していた。

髪の間から覗いている瞳は充血し、焦点を帯びておらず、虚空に向けて見開かれていた。

口は開かれ、唾液と血液が混じった液体が顎を伝って流れ落ちていた。

そして、誰もが直視出来なかったのが、彼女の腹部。

少女の腹部は制服ごと大きく裂かれ、内臓が露わになり、臓器特有の生臭い臭気を放っていた。

夥しく流れ出た血液で、制服は腹部からスカートの先まで真っ赤に

染め上げられていた。
赤い果物を踏み潰したかのように、彼女を中心にして血の水溜りが
出来上がっていた。

その場にいた者全員が猛烈な吐き気を催す程の、見るに堪えない姿
だった。

かつて命を持って生きていたとは思えない、家畜動物のような扱い
を受けた無残な姿。

これが人間の仕業だと考えただけで、背筋が凍りつきそうな程の悪
意を感じた。

自分と同じ人間の命を、まるで虫ケラのように奪い、拳句こんな酷
い姿に……

女子生徒を殺した人間は、人の皮を被った化け物に違いなかった。

この事件は後に、「女子中学生変死事件」と銘打たれ、警察によつ
て大規模な捜査が展開された。

女子中学生を殺害した人外な犯人を突き止めるべく、警察はあらゆる
捜査を行った。

だが、懸命な捜査の成果は無く、事件発生から二年経った今も、犯
人は捕まっていない。

九月二十四日、天気は曇り、時刻は午後一時。

鵜村の某高校の屋上から突き出た階段室の上に、金雀枝一月は仰向
けに寝そべっていた。

仰向けに寝そべって、鵜村を覆っている曇りの空を見上げていた。

どこを見上げてても灰色で、どこか無機質で、そしてどこか物悲しさを感じさせる空だった。

一月は体を起こす。そしてポケットから携帯電話を取り出した。

黒い携帯電話を開き、液晶画面の右上に表示された日付と時刻の表示に目を向ける。

9 / 24 Tue

13 : 03

「あれから、今日で二年か……」

日付の表示を見て、一月は呟く。

彼が呟いた言葉は誰にも聞かれること無く、虚空へと消えて行つた。九月二十四日。一月にとってそれは一年の中で最も因縁深い日だった。

因縁深いとは言つても、別に彼の誕生日だとか、そういう日ではない。

九月二十四日。

一月にとって一番の親友であり、同時に想い人でもあつた少女が殺された日なのだ。

彼の言つた通り、あの日から今日で二年になる。

「(……琴音……)」

一月はその二文字を心の中で呟いた。

秋崎琴音。故人、現在はもう、生前の彼女を知る人々の記憶の中しか存在しない少女。

享年は14歳。もしも彼女が存命ならば、現在の一月と同じ年にな

っていただろう。

生きていれば一月と同じ高校へ進学し、友人を作り、普通の高校生活を送っていた筈だ。

その後も十年、二十年……もっと長く生き、人生を楽しみ、人を愛し、愛された筈だった。

だが、彼女の全ての可能性は、十四歳という若さで断ち切られてしまったのだ。

繰り返すようだが、彼女が殺されたのは二年前の今日だった。

「その時」の光景は、二年経った今でも一月の記憶にしっかりと刻みつけられている。

まるで脳に焼き付けられるかのように正確に、かつ写真のように鮮明に。

静寂の中、辺りを赤く染める血の水溜り。その中心に仰向けに倒れていた

「……………ぐっ!!」

固く目を瞑り、齒を噛みしめる。頭に浮かびそうになった光景を必死に打ち消す。

あの光景を一瞬でも思い出すだけで、気が狂いそうだ。

「くそっ……………!!」

一月は悔しげに漏らす。

何よりも腹立たしいのは、琴音を殺した犯人が今も捕まっていない事だ。

彼女の全てを奪っておいて今ものうと生きている犯人のことを

考えると、身を裂くような怒りが込み上げてくる。

彼女を殺した罪を懺悔させるくらいでは足りない。

犯人を殺してやりたい。琴音と同じ痛みと苦しみを味わわせてやりたい。

いや、それでもまだ足りない程だ。

犯人が憎いのは当然だが、警察も警察だ。

琴音を殺した犯人を突き止められない？ ふざけるな。

それなら一体、警察は何のためにあるんだ。

市民の税金で飯を食ってる癖に、ただの無能な役立たず集団じゃないか。

「……………！！」

冷静を取り戻した時、一月は自己嫌悪に駆られた。

今の一瞬だけ、自分がとても嫌な人間になってしまったような気がした。

だが、犯人への憎しみは消えなかった。消える筈が無かった。

一月はその場から立ち上がった。

もうじき昼休みが終わわり、午後の授業が始まる。

午後の授業が終われば、放課後だ。

放課後になったら、琴音が生前祖母と二人で暮らしていた家に行くと思うっていた。

彼女が殺された理由や、犯人に関する手がかりが掴めるかも知れない。

犯人を突き止めてどうするのだろうか？

警察が突き止められない犯人を、自分が突き止めることなど出来る

のか？

一月は分からなかった。

分かるのは、可能性が低くとも何も行動を起こさないよりは良いという事。

このままでは、殺された琴音が余りにも浮かばれない。

一月は階段室の上から降り、階段を下りて自分の教室へと向かう。

……誰もいなくなった屋上に、冷たい風が吹いた。

急に白い霧が巻き起こる、巻き起こった霧は屋上の一点に集まり、竜巻のように渦を巻く。

数秒の後、竜巻のように渦を巻いた霧がまるで溶けるように消え去る。

霧が消え去った代わりに、白い和服を着た一人の幼い少女が屋上に姿を現した。

少女の和服の袖や裾と、長く伸びた艶のある黒髪が空気を泳ぐようになびく。

《みつけた……えにしだ、いつき》

微かに口を動かし、囁くような小さな声で少女はそう声を発する。

途端に、先ほどの霧のように少女が空気に溶けるように消え去った。

「……それでね、この事件にはまだ続きがあるのよ」

「え……どんな？」

一月が教室に向かっていた頃、曇りの日の午後一時の昼下がり。某教室で、二人の女子生徒が向かい合い、話していた。

その話題は、二年前にこの鵜村で起こった、「女子中学生変死事件」。

「それから数日後、殺された女の子と一緒に暮らしてたお婆ちゃんもね、死んじゃったんだって」

「そ、そんな……どうして……!？」

「しかもね、そのお婆ちゃんも女の子と同じように、お腹を裂かれて、酷い死に方をしていたんだって……」

昼休みという憩いの時間に話すには、明らかに不似合な話題。

数週間先にまで迫った定期試験のことや、部活動の事。

もつと高校生らしくてまともな話題は幾らでもある筈だった。

「や、やだ……怖い……」天恒千早は両肩を抱え、表情を恐怖に染める。

対して、佐天文美さてんあやみ天恒千早は千早が怖がるのもお構いなしに続ける、

「それからね、女の子とお婆ちゃんが生前二人で暮らしていた家は『呪いの家』って呼ばれるようになって、気味悪がって誰も寄り付

かなくなつて、二年前から今まで、ずっと放つておかれてるの」

佐天文美は、クラスだけでなく学年でも有名なホラーマニアだった。そのマニアぶりは、「歩くホラー辞典」という名誉なのか不名誉なのかもわからない称号を与えられる程。

彼女はホラー小説にホラー漫画、ホラー映画のDVDやオカルトビデオ。

この世に存在するあらゆるホラー関連作品に通暁していると噂されている。

その噂は正に名実一体。文美の部屋を訪れた者は皆例外なく、彼女のホラー関連作品のコレクションの量に度肝を抜かれるとか。

「ねえ千早、放課後さあ、行つてみない？」

「え、行かつて……まさかその『呪いの家』に!？」

文美の提案に、千早は耳を疑った。

大のホラー好きな文美に対して、千早はホラー系統が大の苦手。その苦手さたるや、ホラー映画など当然見れないし、文化祭のお化け屋敷にも入れない程。

「そうだよ!! 何ていうかさあ、血が疼くんだよねえ。ホラーマニアな私としては」

目を輝かせ、うきうきと話す文美。千早にとってはとんでもない提案だった。

このままでは、本当にその「呪われた家」に連れて行かれかねない。どうか話題を逸らそうと教室の中を見渡し、すぐ近くの空いた席に視線が止まった。

「そういえば金雀枝君……今日も独りでいるみたいだね」

千早が指した空席は、金雀枝一月の席だった。

「金雀枝？ ああ、あんなのほつといていいわよ。あいつ誰とも話さないし、こつちから話しかけても余所余所しい返事しかない変な奴だし」

文美は投げやりな口調で答える。

一月は、このクラスでは浮いた存在だった。休み時間にも誰とも話さず、昼休みはいつも屋上で昼食を摂る。

彼は容姿は悪くないし、運動も勉強もそこそこ出来るようだが、あまり人と関わりたがらない性格のようだった。

「そうそう。噂で聞いたんだけどさ、金雀枝って何か中学の頃に一番の親友を亡くして、それ以来生きる気力を失ったとか……」

「え！？ そんな……金雀枝君、かわいそう……」

あくまで噂なので、本当かどうかは定かではない。

もしも本当なのだとしたら、彼に同情したくなる話だった。

だが、その噂は紛れもない「真実」だった。

さらに、一月が亡くした「一番の親友」というのは、ついさっきまで自分達が話していた「女子中学生変死事件」の被害者のことだったのだ。

もちろんそんな事は、文美も千早も知る由も無かった。

昼休みの終わりを示すチャイムが鳴った。

「おっと。じゃあ千早、放課後は『呪いの家』に集合。マッハでね」

「えええっ!?!? け、結局わたしも行くの!?!?」

話題を逸らして回避する作戦は、失敗に終わったようだった。

観念するしかないようだった。文美は基本、一度思い立てば止まらないタイプだ。

大きくため息をつき、千早は机から教科書とノートを出し、次の授業の準備を始める。

もしも、文美があんな提案をしなければ。

もしも千早が、文美を強引にでも止めていれば。

あんなことには、ならなかったのかも知れないのに……

佐天文美、天恒千早。この二人は、今日が命日となった。

其ノ巻 〱全テノ幕開ケ〱（後書き）

感想、アドバイス、評価、お待ちしております。

それにしても、書いている自分まで鬱な気分になる作品です……

ちなみに、タイトルの「Nacht」は「ナハト」と読み、ドイツ語で「夜」を意味します。

其ノ式　く呪ワレタ家

「あ、ああああ……」

「く、来るな！！　こつちに来るなあ！！」

天恒千早はその表情を恐怖一色に染め、

その隣で佐天文美は、恐怖に駆られながら、「そいつ」を威嚇していた。

だが、二人の眼前にいる「そいつ」は一向に止まる気配が無い。ゆっくりと、ゆっくりと忍び寄り……文美と千早への距離を詰めていく。

「そいつ」が歩み寄って来る分、二人は後ろへと後退していた。

「っ！？」

どん。二人の背中に、何かがぶつかった。

後ろを振り向く。背中に、古びた木の壁が触れていた。

もうこれ以上、後ろに下がることは出来ない。退路が断たれた。

「そいつ」の方を振り返った瞬間、「そいつ」がこちらに腕を伸ばしていた。

二人は反射的に理解した。この腕が触れば、自分達の命は無いと。どうしてだかわからないが、二人にはそれが分かった。

しかし　分かっているも逃れる術は無かった。

「そいつ」の腕が迫る中。千早は恐怖に震え、文美はただ後悔していた。

ここは興味本位で来る場所では無かったと、そして千早を巻き込んでしまったことを、深く深く悔いた。

九月二十四日、午後五時過ぎ。

佐天文美、天恒千早。二人の少女は、十五年という短い生涯を終えた。

一月が帰宅した時、彼の母親は台所で夕食の下ごしらえをしていた。ジャガイモやニンジンや玉ねぎを刻み、鍋で煮ている。

後ろから玄関の扉を開く音が響いた。一月が帰って来たのだ。

「お帰り、一月」

居間に足を踏み入れると同時に、台所の方から母の声が聞こえた。

「ただいま」と一月は返事を返す。

そして肩に掛けていた鞆を下ろし、ダイニングテーブルの上に置く。

「……!？」

一月は、ダイニングテーブルの上に置かれているクマのマスコットに視線を向けた。

クマのマスコットは体の部分が茶色で、目は小さな黒いビーズで作られている。

口はギリシャ文字の「」のような形をしていた。

鞆や携帯電話にぶらさげるくらいの大ささの、ミニサイズのマスコットだ。

「これって……もしかして……!？」

手に取ってみて、一月は確信した。

このクマのマスコットは、小学生の頃に琴音から貰った、彼女の手作りの物だ。

大切にしていたが、何年も前に失くしてしまった筈だった。

どうしてこれが、ここに

「掃除してたらね、どこからか出てきたのよ」

疑問を声に出す前に、一月の母が答えた。

「そのマスコット、一月が小学生の頃に琴音ちゃんから貰った物よね……?」

母の言葉に答えずに、一月は手の平の上のマスコットに視線を向ける。

これを琴音から貰った頃は、彼女は生きていた。元気だった。

けどもう……彼女は生きていない。

「……」

一月は無言で、じっとマスコットを見つめる。

彼女の命日の今日に、彼女から貰った物が出てくる、言いよつた無い皮肉さを感じた。

「一月、琴音ちゃんのこととは……もう忘れなさい」

母の口から、その言葉が発せられた。命令とも忠告とも解釈出来る

言葉だった。

「え……？」母を振り向き、一月は一文字で返事を返す。

「担任の先生から電話があったの。一月君はクラスに馴染もうとしないで、いつも一人でいるんですって……」

「……………」

「一月の気持ちは分かる。琴音ちゃんの事は、本当に気の毒だったと思うわ」

……………一月から返事は帰って来ない。

一月の母は、二年経った今でも琴音の事を引きずっている息子が心配だった。

親友を亡くして以来、息子は火が消えたように人が変わってしまった。

殆ど無口になり、すっかり笑わなくなり、小学校の頃から好きだった剣道もやめてしまった。

そんな彼を見ているのが、不憫で堪らなかった。どうにかして、彼を救いたかった。

「でも、このままそうやって後ろ向きに生きてても、あなたは幸せになんて……………」

「母さんに僕の気持ちは分からないよ」

抑揚を欠いた冷淡な口調。

母親の哀願の言葉を、一月は一言で断ち切った。

「それに。僕はきつと、もう一生幸せになんてなれないと思う」

続けてそう言うと、一月はマスコットをポケットに押し込み、再び玄関へと向かう。

「出掛けてくる」母に背中を向け、一月は一言だけ言った。

「あ、一月……!!」

息子から返事は返ってこなかった。代わりに、玄関の扉を閉める音が響いた。

台所に一人残された一月の母は、大きくため息をついた。その表情は、悲しみと無力感で満たされていた。

「誰かあの子を、一月を救ってあげて……」

無力感と悲しみに全身を覆い尽くされ。

いつのまにか、口からそんな言葉が発せられた。

《たすけて……あげようか?》

「!?!」

突然のその声に、母はビクツと身を震わせた。

今現在、この家の中には自分以外の者は誰もいない筈だった。

では、この声の主は、一体

《いつきを……たすけてあげようか?》

小学生くらいの、幼い少女の声だった。

「誰!? 一体、誰なの……!?!」

居間を見渡すが、声の主は分からなかった。

それから数十秒。その少女の声が一月の母に語りかけてくることはもう無かった。

気のせい？ それとも……幻聴？ 一月の母はそう思うことにして、再び夕食の準備へと取り掛かった。

九月二十四日、午後五時半。

金雀枝一月は、鵜村のある不気味な廃屋の前に立っていた。木造の一階建ての廃屋。

窓ガラスは割れていて、壁や屋根は目に見えて老朽化している。廃屋を囲むブロック塀は至る所にヒビが入っていて、手入れされていない庭は雑草が繁茂していた。

さらに植えられた木々が大きく枝を伸ばし、無数の葉をつけている。そのせいで、見るからに庭や家への日当たりが悪そうだ。恐らく湿った場所を好む虫には絶好の環境なのだろう。

玄関に続く道に敷き詰められた敷石の上には、ムカデやワラジムシといった、見るだけでも人間の不快感を催す虫が這っている。

正しく、ホラー映画にでも出てきそうな雰囲気の家だ。

ひとたび地震でも起これば、すぐにでも倒壊しそうな廃屋。

建物を命ある物として扱うなら、この廃屋は命を失った、すなわち死んだ建物だった。

表札には「秋崎」とある。ここが、生前の秋崎琴音が祖母と二人で

暮らしていた家だ。

言うまでもないだろうが、今現在この家は空き屋。つまりここに住んでいる人間はいない。

住むどころか、村の者は誰一人としてこの家に寄り着こうとはしなかった。

その理由は、二年前からこの村中に広まったある噂が原因。

「女子中学生変死事件」が起こってから、この家は「呪われた家」と呼ばれるようになった。

この家には、惨殺された少女の怨霊が宿っていて、家を訪れる者を例外なく呪い殺すのだという。

さらに、少女の霊は自分が受けた痛みを他人に味わわせようと、呪い殺した者の腹を裂くらしい。

これらはいくまで、ただの「噂」に過ぎない事だ。

しかし、鵜村には死者の残留思念、つまり死者がこの世に残した想いを重んじる風習がある。

他にも、死者を愚弄する者には祟りがあるという言い伝えもあるのだ。

故に誰一人、自分から進んでこの「呪われた家」に近づこうとする者はいなかった。（ただし、一月の知る限りでは、だが……）。

そして今正に、一月はこの「呪われた家」に足を踏み入れようとしていた。

恐れが無い、と言えば嘘になる。しかし、恐れよりも寧ろ、真実を知りたいという気持ちの方が強かった。

二年前の今日、琴音はどうして殺されたのか。彼女を殺した犯人は、一体誰なのか。

目の前の不気味な家、「秋崎の廃屋」に、何か手掛かりがあるのか

も知れなかった。

一月には最早、引き下がるつもりは無かった。琴音を殺した犯人、警察が見つけれないなら、僕が見つけてやる。見つけ出して、琴音が味わった以上の苦しみを与えてやる……！！

意を決して、一月は眼前の廃屋へと足を進め始めた。

彼の足が廃屋の敷地内に届こうとした、その時後ろから、聞き慣れない少女の声が聞こえた。

《だめ……その家に入ったら、だめ……》

一月ははっとして振り向いた。

自分の後ろには 誰もいない。

「……………」

今の少女の声、気のせいだろうか？

或いは、この「呪われた家」に無意識に恐れを抱いていて、その恐れが発した幻聴なのか。

一月は踵を返し、「呪われた家」に向き直る。

そして彼は、家の入口へと歩を進め始めた。

其ノ弐 〱呪ワレタ家〱（後書き）

感想など、待っています。

次から本格的に、怖くなる予定です……

其ノ参　　ゝ灰色ノ日記帳ゝ（前書き）

追い迫る恐怖。恐怖。恐怖……

其ノ参　　灰色ノ日記帳

「っ……！！」

玄関の引き戸を開けて廃屋に足を踏み入れた一月は、思わず表情をしかめた。

琴音が生前祖母と二人で暮らしていたこの家は、かつて人の営みがあつたとは思えない程に荒れ果てていたのだ。

壁は至る所が剥げて木目がむき出しになっていて、天井の一部分が腐つて梁が落ちている。

外観以上に内部の老朽化は激しく、不気味で悍ましい雰囲気か辺りを満たしていた。

現在は陽が落ち始めている時刻という事に加え、庭の木々に遮られて日当たりが悪い所為だろう。

廃屋の中は非常に薄暗く、数メートル先も見渡せない程だ。

さらに、廃屋内には土やカビのような臭いが漂っていて、空気がひどく淀んでいる。

息を吸うたびに、鼻腔に淀んだ空気が流れ込んでくる。

……人家とは、二年間放っておかれただけでここまで荒廃するものなのか。

制服の袖で鼻と口を覆い、土足のまま、一月は再び歩き始めた。

土間から一段上がると、板張りの廊下だった。

床板も腐食が進んでいるようだ。歩きたびに、ギシイ、ギシイ……と不快な音がする。

廊下を歩いて、一月は手近にあった右側の扉を開けた。その部屋には割れた窓があって、微かに差し込んだ陽の光が部屋の中を照らしていた。廊下と比べれば明るかったものの、それでも薄暗いことに変わりはない。

地面を踏んでいる感触が廊下と違う。板張りの床じゃない。視線を下に向けると、土まみれのボロボロのカーペットが敷かれていた。

「（……カーペット？）」

一月はふと思う。

カーペットが敷かれているということは、この部屋は人と接する機会の多かった部屋ではないだろうか。

少なくとも、人が全然立ち入らないような部屋にカーペットを敷いたりはしないだろう。

「（こう暗いと、何も出来ないな）」

制服のポケットを探り、一月は銀色の小さなキーホルダーライトを取り出した。

普段は、家や自転車の鍵を一まとめにするのに使っている物だ。円筒型の形で、ボタン電池内臓。丸いボタンを押せばそれだけで白色のLEDが点灯する。

懐中電灯程の明るさはないが、これで少しは暗闇を紛らわせる筈だ。

キーホルダーライトを点灯させる。すると部屋の一部が少しだけ明るくなり、部屋の脇に置かれた机が一月の視界に入った。

割れた窓からの風雨に侵されたのだろう。机の上にはボロボロの紙やノートや教科書、プリントファイル。それからシャーペンシルやボールペン等の筆記用具が散乱し、それらの一部は床にまで落ちていた。

「（いや、待て……！！）」

ふと、一月は気付いた。

ノートや教科書、プリントファイル。

それらを使うのは、主に高校生や中学生、すなわち「学生」ではないだろうか？

ここが「廃屋」になる前は、二人の人間がここで暮らしていた筈。

一人は琴音の祖母。そしてもう一人は他でもない、秋崎琴音。

だとすれば、この部屋は

「（まさか、琴音の部屋……！？）」

その一月の予感、程なくして確信に変わった。

壁に掛けられた、ヒビの入った額縁に収められている一枚の表彰状によって。

キーホルダーライトでその表彰状を照らし、一月は印刷された内容を読む。

表彰状

秋崎 琴音

上記の者を、日本剣道協会公認、第37回夏の剣道大会中学生部門において、

優勝したことをここに証明します。

……その下には日付と剣道協会会長の名が印刷されていた。けれど、名前以外の文章など、もはや頭に入らなかった。この表彰状は、あの中学二年の夏の剣道大会の時の物だった。決勝戦で一月と琴音が戦い、琴音が勝利した時の。

「（やっぱり……この部屋は……）」

嫌でも理解せざるを得なかった。

琴音への表彰状があるということは、やはりそうだ。そうだったのだ。

ここは彼女の、琴音の部屋だ。机の上に散乱したノートや教科書は、全て生前の彼女が使っていた物なのだ。

琴音の部屋、恐らくは存命の間に彼女が最も接していた場所だろう。二年前に命を失うまで、彼女はあのベッドで眠り、あの机で勉学に励み、そして

足元に落ちているこの日記帳に、一日の出来事を綴っていた。

「……」

足元に落ちていたノートには、灰色の表紙にサインペンで「日記帳」と書かれ、その下に「秋崎琴音」と書かれていた。間違いない、一月には分かる。この字は間違いない、琴音の字だ。

灰色の日記帳を拾い上げ、手で土埃を払う。

そこらの文具店や百貨店で売っているような、ごく一般的な日記帳だった。
二年間ずっとここに落ちていたせいで汚れや傷みが酷いが、内容を
確認することは出来そうだ。

「……」

灰色の日記帳の表紙を見つめ、一月は暫く黙っていた。

自分が手にしているこの日記帳程、彼女の死に関する手掛かりに繋がりそうな物は無いかも知れない。

だが故人と言えども、これは他人の、それも自分が想いを寄せていた少女の日記帳だ。

勝手に見るのは、やはり気が引ける。

しかし、見なければ何も前に進まない。彼女の死の真相も、彼女を殺した犯人もわからない。

「（ごめん琴音……君の死の真相を知るためだ。この日記帳、読ませてもらおうよ……）」

一月は心の中で、今は亡き琴音に告げた。

もしも彼女が生きていたら、何と言っただろう。

灰色の日記帳の表紙をめくる。一ページ目、日付は二年前の九月十九日から始まっていた。

琴音が殺されたのは、九月二十四日。九月十九日ということは、その五日前ということになる。

所々破れ、織り目が付き、白かったであろうページの紙は、黄土色に変色していた。

そして、その黄土色の紙の上には、シャープペンシルで、横書きで、
琴音の字で、日記が綴られていた。

一月はキーホルダーライトを口で銜え、日記帳を照らす。
開いた両手で日記帳を持ち、琴音の日記を読んだ。

二 × × 年、九月十九日。

今日は、朝からいつちいと会った。

中学に進学してから一緒に遊ぶことは減っちゃったけど、家は近いし、

剣道部の時にも、剣道場でも会えるからまあいっか。

にしても、いつちいは相変わらず目玉焼きにソースをかけて食べてるって言うてた。

目玉焼きには、断然絶対醤油だよな。

今日の英語の授業で、単語の小テストがあった。

15点満点のうち、私は14点でいつちいは15点。いつちいやっぱ凄いなあ……

もうじき中間試験がある。数学勉強しないと、赤点になっちゃいそう。

じゃあ、今日も夜十二時まで勉強するとしますか。

これが、一ページ目に書かれた内容だった。

文中に数回出てきている「いつちい」とは、琴音が付けた一月の愛称。

小学校の頃に初めて知り合った頃は、琴音は一月を「金雀枝君」と呼んでいた。

その後、仲良くなるにつれて、彼女は一月を親しみを込めて、「いつちい」と呼ぶようになった。

それまでニックネームを付けられたことが無かった一月には、そう

呼ばれるのは中々に新鮮だった。

だけでもう そのニックネームで僕を呼ぶ人はいない。

灰色の日記帳を読むうちに、一月は琴音が在りし時のことを思い出し、涙が出そうになった。

琴音が隣にいた日々に戻りたかった。

もう一度、「いつちい」と自分のことを呼んでもらいたかった。

しかしそれは、所詮叶わぬ願い。彼女はもう、この世にはいないのだから。

琴音と共に過ごした日々は、どんなに願おうと、何をしようと、取り戻すことは出来ない物。

何故なら、死んだ人間は絶対に生き返らないから。

「（……………ぐっ……………！！）」

一月の悲しみに溢れた表情が、一瞬で険しい表情へと変わる。日記帳を持つ手に、力が籠る。

彼は心の中で、琴音の命を奪った人間への怒りを再燃焼させた。

親友であり、想い人でもあった彼女を惨たらしく殺し、彼女の人生という名の道を断ち切った犯人

どんな道理があろうとも、許すわけにはいかなかった。

「（必ず……………突き止めてやる！！）」

口に銜えたキーホルダーライトで灰色の日記帳を照らし、一月は再びページをめくり始めた。

日記を読み進めたが、それから数ページは一ページ目と変わりなく、彼女の一日の出来事が綴られていた。

九月二十二日を読み終え、次のページは二十三日。
琴音が命を失う日の、前日の日記だ。

二 x x 年、九月二十三日。

今日、いつちxとx x xをxた。
彼とこxな風にx n xしたこxは、今xで一度も無x x たと思x。
x x ちい、ひxい事言xて

日記はまだ続いているようだが、そこから先のページが破り取られてる。

このページは特に汚れと痛みが酷く、断片的にしか読み取れない。

「(……!?!……)」

何かがある。このページには、何か重大な事が隠されている。
そんな確証はどこにも無かった。しかし、一月にはそれが分かった。
辛うじて読み取れる部分に目を凝らし、一月は考える。

「彼とこxな風にx n xしたこxは、今xで一度も無x x たと思x。」

気になったのが、二行目のこの文章。

二年前の九月二十三日に、何があったというのだろうか？

一月は記憶を辿る。しかし、その問いの答えは出てこなかった。

しかし、琴音が命を失う前日に何かがあったことは間違いない。
そしてその「何か」に、恐らく一月自身も関わっているようだった。

このページの破り取られた部分が見つければその答えが分かるのだ
ろうが、この荒れた部屋の中で紙切れ一枚を探すのは困難だ。

「（このページで終わりか……）」

この今となつては殆ど読めない日記が書かれた翌日が、事件が発生
した日。

すなわち、琴音が殺された日だ。

日記を書く人間がいなくなった以上、次のページは恐らく白紙だろ
う。

そう思つて一月は、何気なくページをめくつた。

九月二十三日の日記の次のページは、白紙

では、なかった。

「っ……！！！」

ページをめくつた瞬間だった。喉の奥から、無意識に引きつるよう
な声が漏れた。

弾くように日記帳を突き離し、反射的に後ずさる。

銜えていたキーホルダーライトが口から落ち、カーペットの上に転
がった。

「……何なんだよ、これ……！！？」

落ちた日記帳は、まるで意志を持っているかのようにそのページを
開き続けていた。

キーホルダーライトの光が無くとも、窓からの僅かな明かりだけで、
その内容は読める。

白紙だと思つていたページに書かれていたのは、ただの「文字」。

一月は知っている。琴音は心優しい性格の少女だった。

「殺してやる」、「こんな下賤な言葉を、彼女が使う筈が無い。

何かの間違いだ。そうであることを祈り、カーペットの上の日記帳を見返した。

だが、これはやはり琴音の字だ。見間違っ筈など無かった。

「うっ……」

唾をのみ込み、精神を落ち着かせる。一月はもう一度日記帳に手を伸ばす。

伸ばした右手が、日記帳に届こうとした時

廊下の方から、パリン。と何か割れるような音が響いた。

「!?!」

突然の物音に驚き、一月は開け放たれた扉の方に視線を向ける。

扉の向こうには、廊下の壁があった。老朽化して、所々木目が剥き出しになった壁。

今は……皿が割れるような音だ。

「（誰かいるのか……？）」

先ほど落としたキーホルダーライトを拾い、一月は琴音の部屋を出る。

するともう一度、パリン、と何かが割れるような音が響き渡った。

こんな音が、偶然に発せられるのは考えにくい。

きつと誰かが、皿か何かを意図的に叩き割ってこの音を出しているのだろう。

だとすれば、この廃屋には、誰か一月以外の人間がいる筈だ。

「（……ここか……？）」

音は、^んどろりや廊下と襖で仕切られたこの部屋から発せられている
よじだ。

其ノ参 く灰色ノ日記帳く (後書き)

どうでしたか？

今回は結構なボリュームとなりました。

感想、評価、お気軽に下さい。

其ノ四 く牙ヲ剥ク殺意く

パリーン……。襖の向こうから、また何か割られるような音が響いた。

これで三度目だ。

「（やっぱり誰かがいるんだ……！！）」

一月は襖の取っ手部分をキーホルダーライトで照らす。

この襖の向こうの部屋に、誰かがいるのは間違いなかった。

もしかしたら、自分と同じように琴音の死の真相を探っている者なのかも知れない。

そうだとするならば、協力関係を築けるだろうか。一月はそう思った。

一月は襖の取っ手に向かって手を伸ばす。

取っ手に手が届こうとした瞬間、

《駄目だ！！ その襖を開けるな！！》

頭に浮かんだその声と共に、一月の手が止まった。いや、止められた。

《引き返せ、今すぐ引き返せ！！ 金雀枝一月！！》

それは、人間の口から発せられた声ではなく、また耳が聞いた声でも無かった。

「一月の第六感」が発した声だったのだ。

襖を開ける意思はあった。だが、体がそれに逆らっている。

体が、この襦を開けることを嫌がっていた。

「……………」

腕が痙攣するように震え、手の平に汗が滲んでいた。

十五年生きてきたが、こんな事は生まれて初めてだった。

自分の意思に体が逆らうたなんて事は、今の今まで一度も無かった。

一月には、二つの選択肢があった。

自分の第六感の警告に従い、ここは引き返すか。

或いは、第六感の警告を無視して、この襦を開くか。

「……………」

無言のまま、一月は眼前の襦を見つめる。

体が警告を発したということは、この襦の奥には「何か」があるのだ。

その「何か」が何なのかは、一月自身にもわからない。

だがそれはもしかしたら、琴音の死に関する手掛かりに繋がる物かも知れない。

悩んだ末に、一月は後者の選択肢を選んだ。

嫌がる体を強引に従わせ、両手で襦の取っ手を掴む。

「……………ふう……………」

何があるのか。

この襦の先に、一体何が待ち受けているのか……

一呼吸置き、一月はゆっくりと襦を開いた。

その瞬間

「グっ！！！！！」

生臭い臭いが、一月の鼻に襲い掛かったのだ。

一月は反射的に、袖で鼻を覆った。

だが、そんな行為で防げる程の臭いでは無かった。

「うっ、げほ、ごほっ……！！！」

開けられた襖から顔を背け、一月は咳き込んだ。

そして再び、襖の方に顔を戻す。

襖の向こうの部屋は窓が無いらしく、廊下や琴音の部屋とは比べ物にならない程に薄暗い。

しかし、そんなことよりも、何よりも

「（何だ、この臭い……！！？）」

嫌でも鼻に入ってくる、この生臭い臭いは一体
やはりこの部屋には、何かがある。

制服の袖で鼻を覆ったまま、一月は思い切って襖をくぐり、その部屋に足を踏み入れた。

キーホルダーライトで薄暗い部屋を照らす。

すると、壁に埋め込むように設置された仏壇が、視界に現れた。

「（ここは、仏間……？）」

気が付くと、生臭い臭いに混ざって、微かに線香の香りがする。
床は畳敷きだ。思った通り、やはりここは仏間のようだ。

見た所、壁に埋めるように設置された仏壇以外は何も無いらしい。
広い部屋だとは言いつらかった。
しかし、設置された仏壇のせいだろうか、どこか酸かな雰囲気包まれている。

仏間をキーホルダーライトで照らし、一通り見渡した。
しかし、この生臭い臭いの発生源は見当たらない。

「（この臭い、一体どこから……？）」

その時だ。一月の足に、何かが当たった。

「？」

キーホルダーライトを下に向ける。

すると、一月の足元が白のLEDで微かに明るく照らされ、

仏間の畳敷きの床に倒れていた、二人の人間の姿が露わになった。

「うわっ!?!?」

暗い廃屋に、一月の音が響いた。

驚きのあまり、少しだけ後ずさる。

そして、驚いた拍子に荒げてしまった呼吸をゆっくりと整える。

「ハア……ハア……（脅かすなよ……!?!）」

呼吸を整えて、恐る恐る歩み寄る。

観察すると、どうやら倒れているのは二人とも女のようなだ。

それも、一月の高校の制服を着用している。
てことは同級生……？ それとも、二年か三年生……？

一月は、また少し歩み寄り、

「あの、その二人。どうかした？」

声をかけてみたが、返事は無い。

もしや……こんな不気味な廃屋の中で、眠ってしまったのか？

もう一步、一月は近づく。

「もう秋なんだし、こんなところで寝てたら風ひくよ？」

……返事は無い。

熟睡してしまっているのだろうか。

もう一步、一月は近づいた。

「ねえ……」

キーホルダーライトで倒れている二人を照らした。
その瞬間、出る寸前だった言葉は、止まった。

「……え？」

その一文字の直後。

「う……うわあああああ……！！！！！！」

仏間に響き渡る程、狂人のような叫び声を上げた。

弾けるように駆け出し、壁際に移動する。一月は仏間の壁にもたれかかった。

途端に猛烈な吐き気がこみ上げ、一月は仏間の畳の上に嘔吐した。

「うぶ、げほ……！！ か……！！ ごほっ……！！」

吐瀉物に喉が無理やり押し広げられ、口から溢れ出て行く。酸っぱい胃酸の味が、口腔内に充満していた。

「うっ……！！」

次第に、口からは黄色い胃液しか出てこなくなつた。

胃の中に残っていた固形物は、もう出し尽くしてしまつたのだろうか。

一月は理解した。理解せざるを得なかつた。

倒れた二人の少女が、どうして呼びかけても返事をしないのか。

仏間中に漂っている生臭い臭いの発信源が、何なのか。

返事をしなかつたのは 目の前の二人の少女はすでに殺されてい
たから。

生臭い臭いは 二人の少女の、裂かれた腹部からはみ出した内臓
から発せられていた。

溢れ出た血液で、二人の少女を中心に畳の上に大きな血の水溜りが
出来ていた。

赤い赤い赤い、真っ赤な床。まるで赤い果物を踏み潰したかのよう
に、仏間の床一面が血の海だ。

「……！！」

この光景　見覚えがあった。
人が惨殺され、まるで解剖されたカエルのように腹部を裂かれた光景。

真っ赤に染まった制服に、はみ出した胃や腸や肝臓や腎臓。見開かれ充血した目。

家畜動物のような扱いを受け、血塗れの肉塊と化した人間の姿。

一月には既視感があった。

この光景を見るのは、初めてではなかったのだ。

「（同じだ……二年前のあの時と……!!）」

そう。二年前の九月二十四日。

秋崎琴音は、腹部を裂かれて死んでいた。

腹部から内臓を露出させ、充血した目を見開き、辺りに血の海を作り　絶命していた。

丁度、目の前のこの二人の少女のように。

瞬間、一月は前方に何者かの気配を感じた。

いる。誰かが、僕の前にいる……!!

床に向けていた視線を恐る恐る前へと向ける。

口の端から、胃液が滴り落ちた。

前方をキーホルダーライトで照らす、仏間に一人の少女が立っていた。

「だ、誰だ……!？」

少女は制服姿だったが、あれは一月の高校の制服ではない。

やや長めの後ろ髪が、制服の襟にかかっているのが分かる。
こんな死体が転がっていて、生臭い臭いに覆われている場所に整然
と立つ少女。

正常な人間ではないことは、容易に想像がついた。

「……………」

彼女は無言のまま、ゆっくりと一月を振り返る。

一月キーホルダーライトの光を眩しく感じる様子も見せず、また二
人の少女の死体が放つ生臭い臭気に鼻を覆おうともせず。

ゆっくりと、ゆっくりと振り返り、彼女の顔が、一月のキーホルダ
ーライトで照らされた。

その瞬間

「えっ……………？」

口から、無意識にその一文字が漏れた。

荒廃した廃屋。二人の少女の惨殺死体が転がる暗い仏間で、一月の
前に立っていたのは、

二年前に殺された筈の、一月の親友であり、想い人でもあった少女

崎

琴

音

だった。

「え……えっ!？」

目を疑った。

しかし、間違える筈は無かった。

今、一月の目の前にいる少女は、秋崎琴音だった。

夢なのかと思った。

もしや、幻を見ているのかと思った。

何で、何で……！！ 一体、どうして ！？ 殺された筈の彼女が、ここに！？

死んだ人間は、生き返らない。そんなことは十分に理解していた。だが、それならば、今日の前にいる琴音は一体

考えていた時、琴音が一月の方へ歩み寄ってきた。

足元の少女二人の死体を、気にも留めずに踏みつけながら。

少女達の裂かれた腹から露出した臓器が琴音の足に踏まれ、グジュツと言う生理的嫌悪感を催す音を立てた。

「琴音……！？」

一番大切だった親友が、想い人でもあった少女が目の前にいる

筈なのに、一月は違和感を感じた。何だか、違う。

死体を躊躇なく踏みつけたことだけでなく、彼女の雰囲気。

どうしてだかわからない。だが目の前にいる琴音からは、「生きている人間」という雰囲気を感じられなかった。

「琴……」

もう一度彼女の名前を呼ぼうとした瞬間だった。

琴音がいきなり手を一月へと伸ばし、彼の首を掴んだのだ。

「っ！！??？」

背中が後ろの壁にぶつかる。

痛みと困惑と驚愕を同時に感じた。

目の前の彼女にどうしてもこんなことをされるのか、全く分からなかった。

「琴音、何を……!!！」

その言葉に、琴音は答えなかった。

答える代りに、琴音は一月の首を掴んでいる手に力を込め、彼の首を締め上げた。

「が……っ……!!！」

一月は彼女の腕を掴み返し、どうにか自分の首から引き離そうとする。

だが、全力を込めても、首を掴んでいる琴音の腕は離れなかった。少女とは思えない力だった。

「!!！」

次の瞬間だった。

一月の頭の中に、自分の物とは全く違う記憶が流し込まれた。

琴音止める苦しい離せどうしてもこんなことをする何で僕の首を締め何デナンデナンデ

ナンデ何でお前が生きている私はお前の所為で殺されたのにそれなのにどうしてお前は

生きているんだぶざけるな羨ましい憎い恨めしい妬ましい赦さない殺してやるお前もこ

ちらの世界に引きずり込んでやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる

ル

首を掴んでいる琴音の腕を掴みながら、一月は琴音が自分に猛烈な殺意と怒りを向けているのを感じた。

その時、一月は村で流れていた、この廃屋に関する噂を思い出す。この廃屋には、「女子中学生変死事件」で殺された少女の悪霊が宿っていて、廃屋に足を踏み入れる者を呪い殺し、その腹を裂くという噂。

ただの噂だと思っていた。

しかし、「悪霊」と呼ぶ以外に、目の前の琴音の姿は説明がつかなかった。

近くでキーホルダーライトの光を照らして、初めて気づいた。

猛烈な怒りと殺意に満ちた瞳。時折、その体から黒い煙のようなものが瞬いている。

そして、自分の首を掴んでいる手からは、全く体温を感じなかった。明らかに、人間の手の感触では無かった。

「琴音……！！ やめ……頼む……！！」

抵抗しながら一月は哀願するが、聞き入れられる筈は無かった。

悪霊と化した彼女には、もはや自分のことなど分からなかったのだろうか。

琴音が一月の首を締める力は、際限無く強まっていく。

一月にとっては、苦しみよりも寧ろ「悲しみ」の方が強かったかも知れない。

彼女がもう、自分のことを理解できないのだと思うと、涙が溢れてきた。

あの心優しくかった琴音が、こんな姿になって現世にいたなんて

「……………」

意識が途切れ途切れになる。

首を締められて続けている所為で、脳に障害が起こっているのかと思っただ。

視界が急激に白くなり、手足の感覚が薄れていく中。

一月はポケットに手を入れ、小学校の頃に琴音から貰ったクマのマスコットを握る。

そして、もう届かないと分かっているにもかかわらず、もう一度彼女の名を呼んだ。

「……………琴……………音……………」

その時

《だから言ったでしょ？ その家に入ったらだめだって》

その幼い少女の声が、一月の頭の中に響いた。

それと同時に、首を掴まれている感覚が、一瞬にして消え去った。

其ノ四 く牙ヲ剥ク殺意く（後書き）

感想、評価待っています。

どうでしたか？ ヒロインが敵として主人公を殺そうとするのは、あまり例を見ない演出だと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0205y/>

Nacht 置き去りにした一つの思い出

2011年11月16日21時27分発行